

平成 27 年度 海外臨床薬学研修報告書  
「海外臨床薬学研修を通して学んだこと」  
研修期間：平成 27 年 7 月 15 日～7 月 27 日  
研修先：サンフォード大学薬学部及び関連施設

薬学部薬学科 6 年

100973262

水野 彩

私は、平成 27 年 7 月 15 日から 7 月 27 日までアメリカのアラバマ州バーミングラム市にあるサンフォード大学薬学部及びその関連施設において海外臨床薬学研修に参加させていただいた。現地の講義を受け関連施設を訪問することで海外における薬学教育を実体験し、海外の教員及び薬学生と交流することで彼らの薬学に対する姿勢を学び、それぞれの国の優れている点や問題点を知ることができた。

サンフォード大学では、名城大学だけでなく各国の大学の薬学部と国際交流を行っており、今回の研修では韓国とエジプトの薬学部からの参加者もいた。韓国の薬学部の制度もアメリカと同じであり、大学教育を受けた後に薬学部へ入学する。エジプトは 5 年生制度であり、医療もまだ発展途上にあるため臨床医学の先進国であるアメリカにおける実態を学びに来ていた。各国の背景を踏まえ、様々な意見を聞くことができ貴重な体験となった。

研修内容は、大学内にて講義を受け基本的なアメリカにおける薬学教育システムや各疾患に対する薬物療法について学んだ後、2 日間関連施設のクリニックや病院を訪問し実際の臨床現場での薬剤師の働き、他の医療スタッフとの関わり及び患者への対応を学習した。

講義の内容は、アメリカにおける薬学制度・カリキュラムについての講義から始まり、代表的な疾患（心不全、敗血症）の講義や研修の後半には韓国の薬学生による高血圧に対する症例報告、小児医学、老年医学、疼痛コントロール、抗凝固療法、医療安全、医療保険などの講義も含まれていた。講義中は日本の講義形式とは異なり、疑問に思ったことや先生が投げかけた質問に対して学生が自信を持ってはきはきと解答していたことが印象的であった。解答に対して先生から意見があってもひるむことなく答えており深く考えていることを感じた。

アメリカの薬学教育のカリキュラムには、1 年次から 3 年次に最低 300 時間の実務実習が組み込まれている。最終学年である 4 年次には短期留学も含めた複数の施設を 4~6 週ずつをまわり、1 年かけて最低 1440 時間の実務実習を行う。韓国では 140 時間の実務実習が組み込まれており日本の実務実習は病院・薬局を各 11 週ずつ経験でき 1 番実習時間は長いですが、5 年次に初めて臨床現場に出るので実習を経験した際に初めて大学での講義が実体験と重なり日々の講義の重要性を認識することができた。先にも述べたように、このように 1 年次から一定の時間を実際の臨床現場で過ごすことで、早期から現場の薬剤師の役割を認識することができ、このことが卒後のアメリカの薬剤師としての活躍へと繋がっているのではないかと感じた。しかしこのようなシステムが実践できるのは、アメリカは 2~4 年の大学教育を受けた後に薬学部へ入学するからだと思われる。常に大学の講義内容を現場での体験と重ね合わせながら学習できる教育制度は薬学教育の早期からこの気付きを与えることができる。また、大学では病院や薬局で働いている薬剤師が講義を行っており、常に臨床現場に近い講義を受けることができる。このこともアメリカの薬学生の意識の高さ、薬剤師の立場、信頼性に繋がっているのではないかと感じた。また、実習施設の中には病院や薬局だけに留まらず海外における研修も選択できるようになっており、これにより多くの研修施設を回ることで多様な経験を積むことができるのではないかと感じた。更に薬

剤師になってからも1年に15時間の学習が推奨されており、更なる地位の向上に繋がっているのではないかと感じた。

関連施設の見学は、St.Vincent's Birmingham（私立総合病院）、Jefferson County Department of Health、Princeton Hoover、Christ Health Center（クリニック）、FMS Pharmacy（薬局）の5施設を訪問することができ、私は、Jefferson County Department of HealthとChrist Health Centerを訪問させていただいた。アメリカは、日本のように皆保険制度ではなく、様々な保険があるため、保険の有無やどの保険に入っているかによって使用できる薬剤が異なるという問題がある。バーミングハム市周辺は貧困層が多く、生活習慣病である高血圧や呼吸器疾患が多いとのことだった。貧困層が多いため、保険に加入している患者さんはほとんどおらず、その穴埋めを税金などでまかなっている。よって、昔は低所得者の方はお金を払わなくても診察を受けることができ薬も受け取ることができた。しかし、現在は\$3.9だけを払わせるようにした。このようにお金を払わせたことでコンプライアンスの向上にもつながったそうだが、教育も満足に受けられていない患者さんも多いため服薬指導などの教育も大変であることを知った。また、その服薬指導は面談も含め30分くらいかけて行うとのことだった。薬の飲み方については本人が理解したかを確認するためにオープンクエスチョンで質問するとのことだった。このようにアメリカの基本的な制度を知ることができ、更には地域性も感じることもできた。また、保険の問題・貧困の問題など日本ではあまり問題とならない問題を目の当たりにし、日本の整った医療制度に気付くことができた。

この海外研修を通して感じたことは、アメリカの薬剤師の社会的地位の高さは大学の薬学部での教育、現場での積極的な介入によるものであるのではないかということである。大学での教育の初期から薬剤師としての業務や責任感について学ぶ場面が多く、自分の将来の薬剤師像を持ちやすく、講義や実習への意識の持ち方が異なってくるのではないかと感じた。もちろん薬剤師になってからも日々勉強しなければならないが、それ以上に薬学の基礎や薬剤師としてなすべきこと、考え方を学べる学生時代の勉強はとても大切であると感じた。薬剤師になってからでも遅くないと思うので、薬剤師としてなすべきこと、できることを考えながら熱意と責任感を持って働いていきたい。

最後に、このような有意義な研修を経験させていただきありがとうございました。今回国を越えて薬剤師の方、先生方や学生と交流することができ貴重な時間を過ごすことができました。今回の経験を活かし、今回描いた将来になりたい薬剤師像に少しでも近づけるように社会に出てからも努力していきたいと思います。